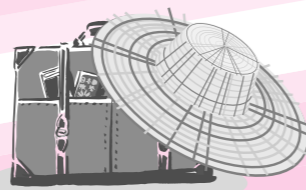


特集 ブラジルに移住して100周年



座談会

今年日本人が、遠く2万4,000kmもの船旅を経てブラジルに初めて移住してから100年目を迎えます。しかしながら私たち日本人には川崎市に在住する外国人の中でも4番目に多いブラジルの方たちのことについて、よく知られていないというのが、本当のところだと思います。そこで今号では、「在日ブラジル人の、在日ブラジル人による、在日ブラジル人のための児童教育」というボランティア活動を行っている「GRUPO ABCグループ アーベセー」のメンバーの皆さんに、ブラジルにいた時のことや日本に来てからのことなどをお話していただくことにしました。

- 【参加者】
 中森 ジュリア みどりさん
 エイゾ スエリさん
 佐藤 リリア 信子さん
 千葉 みねさん
 大前 理穂さん（日本人ボランティアに翻訳のため参加してもらいました）

【座談会開催日・場所】
 2008年4月19日（土）子どもゆめパークにて

司会：まず、自己紹介をお願いします。
 中森：1991年に研修生として大分県で9ヶ月過ごしました。その時、知り合った日本の男性と結婚し、1993年に川崎にきました。男の子が3人います。私は祖母が日本人だったので、日本的な教育も受けましたが、現代の日本人の感覚とは違うように感じています。「GRUPO ABC」とは最初からかわってきました。私自身も子ども達の教育についてはいろいろと考え、ブラジルで生活したこともあります。現在は日本で教育することにしました。
 スエリ：私は1990年（出稼ぎピーク時）に、主人と浜松に仕事とマッサージを習得するため来日し、1996年川崎にきました。男の子が2人いて、ブラジルの学校へ通わせるため、2001年～2004年はブラジルへ帰りましたが、仕事を

得ることが難しく、家族みんなで暮らすために、日本に住むことにしました。私の祖父母は沖縄出身ですが、私がブラジルに住んでいた地域はどちらかといえば、ブラジルにとけこんで生活する環境だったので、あまり日本語が上手ではありません。
 佐藤：主人の仕事で1991年～1994年は宇都宮で生活しました。そして転勤で川崎にきました。現在、主人は単身赴任で宇都宮にいます。24才の娘と高校生の息子がいます。娘はブラジル語や文化についても興味もっていますが、息子は無いようです。中森さんのご両親と私の両親が知り合いだったので、川崎に来てからお互いにこういう活動をするようになりました。電話相談や医療通訳などもしています。
 千葉：先に来日していた主人と、その後結婚して1991年に川崎へ来ました。主人は日本で会社を営んでいるので、娘と息子は日本で教育していますが、2年ごとにブラジルへ行き、ブラジルの家族と過ごすようにしています。



中森さん 通訳：大前さん スエリさん

司会：皆さんはどの程度日系ブラジル人についてご存知ですか？
 スエリ：ブラジルでは日本人に対する評価はとて面白いものです。祖父からよく聞いた話ですが、一世の人たちは長い旅をして日本からブラジルに到着したにもかかわらず服装がきちんとしていて、きれいに食事をしていました。また小さなトランクには必要な物だけがまとめられていて感心されたようです。

私の祖父は戦争を経て一度、日本に戻った時「おまえは日本人ではない」と言われ辛い思いをしたそうです。そのため再度ブラジルに渡ってからはあまり日本語を話さなくなったようです。その後、日系ブラジル人はブラジル人と結婚していくようになったようです。
 中森：私は大学生の時に日本に興味をもちました。祖母に育ててもらっていたこともあり、「古きよき日本」の話をたくさん聞いていましたので、私はすぐに日本に馴染むことができました。

けれどブラジルにいと日本人と言われ、日本にいと外国人と言われることや、祖母から聞かされたいい面だけではなく、日本の悪い面も見えて複雑な思いがします。
 千葉：ブラジルでは日系の人たちがまとまって生活をしていましたので、日本の習慣も受け継がれていたと思います。
 佐藤：二世の時代には日本人の集まりが盛んで、皆が助け合って生活していたのだと思います。日本に来てからはこの「GRUPO ABC」があることで悩みや相談事など互いに助け合うことができ、意味のあることだと思います。
 司会：日本に来て一番驚いたことはどんなことですか。
 千葉：ブラジルにいる時は、日本は経済も発展しているし、何でも一番といわれていたので、ロボットが機械を動かしていると思っていました。来てみて、まだこんな機械を使っているのかとびっくりしました。田舎の方では電車も旧式ですし、トイレが和式だったのにはビックリしました。

中森：ブラジルにはまだブラジル人という人種はおりません。他人と違うのは当たり前で、違いを自慢し合いますからブラジルではいじめを意識せずにいました。
 日本人は生まじめで本人が気にしすぎるのかも知れませんが、他から来るものに抵抗があるようです。
 自分たちと違う人間を仲間はずれにする傾向があり、人間関係を悩むことがあります。

いじめは国民同士の中にもあり、現在だけでなく昔からあったと知り驚いております。
 佐藤：私たちの容姿は一見日本人と変わらないけど、日本語を正確に理解できないことがわかると、受け入れてもらえないことがあり、淋しさを感じます。



佐藤さん 千葉さん

司会：最後に、今後「GRUPO ABC」でどういう活動をしていきたいと思っていらいっしょにいますか？
 日本人が異文化とどう接して欲しいと思っていらいっしょにいますか？
 千葉：日本にいるから、日本の方と仲良くしていきたいのが一番です。
 中森：一人がもし悪いことをし、その人が外国人だからといって、ひとくりにしないでほしいと思います。特にテレビなどの報道に惑わされたくないです。
 スエリ：それぞれの個性を尊重してもらえればと思います。一人がだめだから問題ありということではなく、一人一人の個性を大事にして欲しいと思うのです。
 佐藤：これからいろんなイベントに参加していきたいと思っています。

【座談会を終えて】
 「GRUPO ABC」は母語や母文化を在日ブラジル人児童に教え、またお互いにコミュニケーションをとることで、地域社会でどのように生活していくか、そして自分たちがどのようにアイデンティティを確立していくかを支援しているグループだと思います。私たち、日本人も異文化を持つ隣人や友人の悩みを理解し、自分たちのことも理解してもらえよう努力していくことが、より良い社会を作っていく秘訣ではないかと感じました。
 （取材：青柳・相沢・福地・日地谷）

インタビュー



川崎市国際交流員
 アリアナ・マーさん

司会：いろいろなご経歴をおもちのようですが、まずご自身についてお聞かせください。
 マー：アメリカ人の祖母「アイリン」とブラジル人の叔母「アナ」から、両親に「アリアナ」と名付けられました。ブラジルとアメリカのハーフです。しかし、13歳まではアメリカ東部のあちこちに住んでいたため、文化はアメリカの部分の方が強いです。
 現在、母はブラジルに戻り芸術活動しており、父はエンジニアとして弟とシンガポールで暮らしています。
 私も、日本とシンガポールに暮らしたことがあり、13歳から外国で教育を受けました。大学に入学する前に、両親の支援で、勉強の為に日本に戻って来ました。この経験を通して、困難なことに直面しても、何を基準に物事を判断すればよいのかわかるようになりました。
 その後、アメリカの大学を卒業してから、ディズニーワールドで働いた経験もありますが、今の仕事の方が楽しいです。
 司会：それだけいろいろな国を経て、何故日本を選ばれたのですか？
 マー：最初は「日本」に対するイメージも分からず、恥ずかしながら中国と混同したこともありましたが、父の仕事の関係で横浜市に引越し、3年間くらい暮らしました。アメリカでは毎日ただ流されていました。でも日本にいと、「毎日が新しいことばかり...」と思えることで、自分にとって特に成長出来る場所だと今でも思います。
 司会：現在川崎市職員としてお仕事をされていますが、川崎市とはどういう都市だと思いますか？
 マー：想像をかなり超えた都市だと思います。どのような町か、こちらに来る以前からイメージ

をもっていました。来てからは全く変わりました。町には自然がたくさんありますし、シンフォニーホールを見たときは本当に感動しました。ミュージアムもたくさんありますし、私も仕事や友人が来たときにいろいろと紹介するのですが、案内すると同時に自分自身もたくさん学ぶことが出来ます。
 また、川崎市の皆さんは、川崎が東京の近くにあることもあって、国際的な意識をもっていると思います。いろいろな人の意見を受け入れてくれる姿勢が感じられ、私の意見も尊重してくれれます。
 司会：先頃、姉妹都市事業の一環としてオーラトラリアの交流団とかかわったそうですが、如何でしたか？
 マー：素晴らしいかったです。今回いらした代表団の皆さんがとても親切で、オーストラリアの人々の国民性を垣間見ることが出来たと思います。私が今までかかわったことのない国の人々と触れ合ったことで、世界が広がったと思います。
 また、私は今回、代表団をいろいろなところへ案内しました。砂子の里資料館の浮世絵を見学に行くと、皆興味津々でのめり込んでいらっしやいました。彼らはいつも熱心に耳を傾けてくださり、終わった後には感謝を述べるとともに、質問もしてくださいました。
 やはり日本に関心をもつ人を案内出来ることがこの仕事の素晴らしいさの一つだと改めて思いました。
 司会：最後に何かありましたらお聞かせください。
 マー：「日本」という国は、歴史と文化がたくさんあって難しいですが、関心をもっている母国や外国の人たちにそれを伝えられることは素晴らしいと感じています。子ども達も国際交流で別の文化と触れ合うと、自分の世界が広がっていくでしょう。
 司会：有難うございました。
 アリアナさんは「川崎」に対して、また、「日本」に対してとても関心が高く、全て自分の中に吸収しようとしてされているご様子が大変印象的でした。
 （取材：伊東都、松嶋洋介）